

# 白柳秀湖の日本民族観

—戦前昭和における「東洋」をめぐる議論—

小畑嘉丈\*

## Shuko Shirayanagi's view of Japanese people

—Discussion on "Orient" in the prewar Showa period—

OBATA Yoshitake\*

### Abstract

Shuko Shirayanagi described what the Japanese people are, but it is clear that their characteristic is to remove the Chinese element from Japanese culture, and that nationalism consists of relationships with the outside world.

キーワード：民族，戦前昭和

Keywords：Ethnicity, prewar Showa

### 1. はじめに——民族について

本稿では白柳秀湖(1884～1950)の『日本民族論』(初版は1934年、改版が1942年に出ている)を主な題材として、そこでは「日本民族」の中華文明圏からの切り離しが試みられていたことを中心に見ていくが、まず、考察の対象とする戦前昭和において現実政治にも深く関わり、当時の日本における代表的な政治学者の一人だった矢部貞治(1902～67)の民族についての説を見ることで、当時の民族についての議論を確認したい<sup>1</sup>。

矢部によれば、まず、民族とは、その「基盤そのものは古くから存在していた」<sup>2</sup>が、民族意識がはっきりと成立したのは「やっと近代になってからのこと」<sup>3</sup>であり、「中世の世界帝国とか封建的な身分社会とかが崩壊したあとに、近代人が生活共同体の土台として自覚するに至ったものが、民族であった」<sup>4</sup>という。これに対して白柳『日本民族論』は大半を

古代史に割いているので、民族が近代的なものだとは捉えていない。

矢部は民族の構成要素として人種、言語、宗教その他を挙げるが、そのうちのどれか一つが「民族の決定的な構成要素」<sup>5</sup>となるわけではないとのべる。なお、矢部は人種について、人種と民族の違いに触れた後で、「人種」というものをどうして区別するかも困難な問題で、人種分類の科学的な標準は、実のところ未だに確立されていない」<sup>6</sup>と述べ、更に「血が共通だということは、本当にそうかどうかではなく、実は共通だと信じているという場合が多いのである。しかしもちろん血が共通でなくても、共通だと思っているその信念が重要なので、そのような種族の意識が政治を動かす大きな要因であることは、現代でも決して無視できない」<sup>7</sup>と言う。人種なるものが科学的にはっきりしたものではないという認識は、この世代の政治学者において既に得られていたことがわかる。一方で白柳は「血液」を民族の重要な要素と見ており、日本民族がどのような人種の混淆によって成立しているのかの考察に

\* 理工学部共通教育群非常勤講師 Part-time Lecturer, Division of Liberal Arts, Naturel, Social and Health Sciences, School of Science and Engineering

多くの字数を割いている。

矢部は、「民族の決定的な要素は（中略）自分らが他民族とは異なるという意識、自分らが運命を共にしているという意識、そしてその自分らが共同の生活体をなそうという意欲に求めるほかない」<sup>8</sup>と言う。この、民族という概念にとって決定的なのは、人種・言語・宗教などの属性よりも「意欲」だとする見方は、基本的には今日でも維持されているものだろう。ナショナリズム論の基本文献としてあげられることも多いアーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』にも、「（例えば、ある領域の住人であるとか、ある言語を話す人々であるとかいった）単なる範疇に分けられた人々は、もし彼らが、共有するメンバーシップの故に、互いにある相互的な権利と義務をもっていると固く認識するならば、その時、民族となる。ある範疇の人々を民族へと変えていくのは、お互いがそのような仲間であるという認知であって、何であれ、彼らをメンバー以外の人々から区別するような他の共通する属性ではないのである」<sup>9</sup>という記述がある。ゲルナーは意欲ではなく「認知」という言葉で表現しているが、属性によって民族が決まるわけではないとする点で、矢部の民族観と共通している。

また、矢部が民族の定義を「自分らが他民族とは異なるという意識」から説き起こしているところにも注目したい。ある民族を語る際、中心となるべきなのはその民族について直接語ることであろうと思われるが、しかし他民族との差別化の意識がどうしてもそこにはちらついて見える。戦前昭和においては、それは中国との差別化として表れていたことを本稿では見ていきたい。その差別化は、単に「異なる」というところから、進んで敵対関係へと転化することもしばしばであることについては事例に事欠かない。民族は文化の面から語られることも多い概念だが、カール・シュミットの友敵理論にならえば、やはり政治的集団としての面も無視し得ないことになるだろう。民族意識の根底では、外界への緊張感が漲っている。

## 2. 白柳秀湖『日本民族論』概観

矢部は民族の構成要素として、まずは人種、言語、

宗教などを挙げていたが、白柳もこれと相似する流れで論を進めている。古代以来の、また世界各地の人種、宗教、言語に触れながら、これらを最も良く総合し渾融したのが日本民族である、というのが白柳の説だが、やや独特なのは、民族の構成要素として、更に（科学）技術に触れていることである。具体的には製鉄技術について触れている。白柳の『日本民族論』の力点の一つが日本の中華文明圏からの切り離しであることについては後に詳しく述べるが、製鉄の歴史を叙述する箇所においてもその傾向は表れている。白柳は鑄造と鍛造に注目して、日中の製鉄技術の歴史は異なるとする。

「日本民族の文化は大部分崑崙系の漢民族から学んだのであるという過去の誤った歴史的通念に患わされて、学者の中には日本刀の鍛造術ももとは支那の帰化人が来て日本に伝えたものであろうという漠然たる常識判断を追っている人も少なくないようだ。しかしながらこれは大へんな間違である。日本刀は初めから精錬・鍛冶・して造ったものであり、支那の刀剣は元来型に嵌めて鑄造したものである」<sup>10</sup>。

この文は「初めから」がポイントで、古代中国における刀剣は青銅製だが、日本では「初めから」そうではなかったというのが白柳の説である。白柳は続けてこう述べる。

「日本の古剣も支那と同じように銅もしくは青銅の鑄造物であつたとする人の説をいいかえると、天孫民種はその高天原時代から刀剣を全て支那本土に仰いだということになるわけだ。それでないにしても、刀剣製作の技術を支那人から学んだということになる。仮にそれとして、われわれの第一にいぶかしく考えることは、記・紀・の記述の中にあまりにも日本刀の威徳に関する記述の多いことだ。たとえば伊弉諾尊が、十握剣を抜きて軻遇突智を三段に斬ったとあり、月夜見尊が忿然色を作し、廼ち剣を抜いて保食神を撃殺したとあるなど、その切れ味の如何にも素晴しかったことが文字の外に溢れている（中略）それほど精鋭な武器を備え具していた天孫のお国の刀剣がすべて支那からの輸入品もしくはその模造品だったということはどうしても考えられぬのだ」<sup>11</sup>。

青銅が強度において鉄よりも劣るのはその通り

だが、しかし神話からの推測というのは議論として強固なものとは言えず、白柳も「どうしても考えられぬ」と言うにとどめている。

引用箇所に出てきた、月夜見が保食神を殺してしまったという逸話を白柳は好んで言及する。この逸話が、日本民族が北種と南種の混淆によって成り立った民族だということをよく表している、と考えたようだ。白柳は、月夜見が保食神を殺してしまったのは、言葉が通じなかったせいだろうという。

「保食神と月夜見尊との外交工作に関するくだりで、月夜見の尊が一旦の忿恚に駆られ、保食神を撃殺されたとあるのは、前後の事情及び叙述の筆触から推量して、言語が十分に通ぜず、北種と南種の間に於ける習慣の相違から意志の疎通を欠いたためであったに相違ない」<sup>12</sup>。月夜見は北種、保食神は南種と位置づけられている。白柳は日本民族の中核は北種だと考えるので、その主神の一人である月夜見は北種でなければならないだろうが、保食神が南種なのは、口から食べ物を出したからだという。

「現にアフリカ大陸の心臓部ーベルジウム領ーコンゴウに蕃衍しているネグリイト族の間には、たとえば象のような素晴らしい狩猟の獲物があつた時、酋長はその背に跨り、刀を執って肉を割き、先ず自分の口に含んで、周囲に群っている氏人たちに、一々口移しにそれを振舞ってやることが荘重な儀式とされていることが報告されている。しからば、こうした習慣はマダガスカルもしくはザンジバル辺りから海を越えてインド洋に乗出し、更に西南太平洋に延び、それが年緒を経る間に幾分違った様式でアジア大陸南種の間にも行われていなかったとは限らぬ。従来全く思量し難い奇態な習慣として伝えられてきた保食神が一旦口に含んだものを吐出して月夜見尊に備え奉ったという一条の物語も、保食神が南方種族の代表的祖神である限り、さして不思議とするに足らぬことと思われる」<sup>13</sup>。アフリカの習慣を保食神が受け継いでいたというのはずいぶん遠大な話だが、白柳にとっては、日本民族は世界で最も広く民種を混淆した民族なので、むしろ好都合なのであろう。こうした論法で、白柳は北種と南種が結びついて日本民族となったとの説を展開する。

事例をもう一つだけ引用する。よく知られた因幡の白兔伝説も、白柳によれば北種と南種の交わりを

伝える神話ということになる。

「出雲国に関するくだりにも白兔と鰐との争議に関する一条があり、古くから神前の舞踊などに取材されてきていることは、普く人々の知るところだ（中略）出雲国は高天原系の原日本人、それと同種異族の関係にあるアジアの北種を中心として、大わだつみ系国津神（アジア大陸南種）大やまずみ系国津神（大洋種）の各種族を打って一丸とした一種の連立国家であつて、神話は、アジアの北種を白兔で表徴し、アジアの南種を鰐で表徴していたのだ（中略）鰐は日本の近海にはほとんど姿を見せぬ動物だ。揚子江まで南下すると初めてアリゲータアと呼ばれる鰐の一種が見られる。しかし一般には何と考へても、南支那・仏領インド支那・タイ・ビルマ・マレー・もしくは南洋諸島のものだ。従つて漢・魏・時代支那人から倭人と呼ばれた民種は、現今の南支那から仏領インドシナ・タイ・ビルマ・マレー・方面にかけてはびこっている獏々（タイ）モンクメール・サカイ・もしくは苗族のいずれかに当たるものと見なければならぬ」<sup>14</sup>。この伝説については、「ワニ」が文字通りワニを意味するのか、サメを意味するのかという議論が古くからある。サメ派の論拠の一つは、日本にはワニがいないということだが、白柳にとってはむしろ、日本にはおらず南方にいるワニが神話に出てくる方が都合が良かったことになるだろう。このようにして白柳は神話の世界になどに北種と南種の混淆を見出していき、日本民族は「世界に有りと有る民種・民族・の血統と文化とを渾融同化していることが明かである（中略）この多種多様な血統と文化とを渾融同化して渾一民族を作り上げた天孫民種の包容力と消化力との偉大に想い到れば、今更の如く驚嘆・崇敬・の念を新たにせずにはおられぬのだ」<sup>15</sup>と結論する。

### 3. 中国との関係から『日本民族論』を読む

白柳秀湖が、「民族」を初めてキーワードとして初めて著した書物が『日本民族論』であつた<sup>16</sup>。この著作によって白柳は著作の題名の多くに「民族」という言葉が入ることになる「民族期」に入るが、同書は同時に、白柳が唯物史観から離脱し始める画期ともなった<sup>17</sup>。白柳は『日本民族論』において、

民族を分析するために「気候帯説」<sup>18</sup>という方法を採り、「自由主義国家、就中イギリスの社会的国家組織を温床として打ち立てられたマルクス経済学の最も大きい欠陥は、経済の進歩が世界人類を支配していく力を絶対と見、太陽の光線が地球を支配する威力の更に根本的にして圧倒的であることに思いを致さなかったことにある（中略）マルクス経済学の最も大きい弱点は、気候帯文化をあまりに軽視し過ぎたことにある」<sup>19</sup>と述べ、マルクス主義から軸足を離しつつあることを示している。

気候帯説を採るため、白柳は世界を東西ではなく南北で分けるべきだと唱える<sup>20</sup>。そして、日本民族は、その南北の民族を最もよく混融させることに成功した民族だと述べる<sup>21</sup>。こうした自民族中心的な見方は、特に 1930 年代から 1940 年代にかけては珍しくないものだったと思われるが、興味深いのは、白柳が日本民族の中心となる要素は北種であると強調することである。日本民族の中心をなす「民種」<sup>22</sup>は白柳によれば「天孫民種」<sup>23</sup>だが、この天孫民種が北種だというのが白柳の主張である。白柳は「北種中心論」のために『日本民族論』のかなりの頁を割いているが、白柳にとって、日本民族は北種でなければならないようにも見える。白柳が『日本民族論』で狙いとしたことの一つは、日本民族の、中華文明からの分離だった。白柳によれば漢民族は南種であり、天孫民種がこれとは起源を異にすることを繰り返し述べている。

白柳は日本と中国の分離をいくつかの点で試みている。まず、「支那人は『アジアに住む西洋人』」と表現しており、これは他の作品でもくり返している表現である<sup>24</sup>。たとえば

「ヴェルサイユ会議以来パリ・ロンドン・ワシントン・ジュネーヴ・等で行われた幾多国際会議の席上、支那の代表—顧維鈞・王正廷・の徒が英・米・の操る糸につれて雄弁滔々とまくし立て、民族の血統上インドーゲルマン語の運用を最も苦手とするわが全権の燕尾の裾に喰い下り、散々に委員たちを悩ましたことは、今なお読者の記憶に新たなるところであろうと思うが、崑崙語は何ととってもインドーゲルマン語に近く、支那人はその血統の上からいっても、文化の上からいっても、これを『アジアに住む西洋人』ということが少しも過言でなく、『同種・

同文・』というような常識的な概念で彼らを度し易いものと見てかかるということは、すでにその根本から間違っていることだ」<sup>25</sup>と述べており、言語面だけでなく、人種・文化の面からも「西洋人」的であるとする。また、伝統的な「同種同文」といった文化的側面からの日中提携論の批判も見据えているのだろう。

白柳の日本史からの中国的な要素の排除という点で念が入っていると思われるのは、坂上田村麻呂についての説である。白柳は、坂上田村麻呂が漢民族系の渡来人ではないという説を採る。

「安倍比羅夫将軍の後、阿賀野川以北における奥・羽・の靺鞨—靺鞨族に対して徹底的膺懲を加え、皇城守護の神として、京都の将軍塚に分祠せらるるに至った坂上田村麿将軍が、原日本人ではなかったということは、何人にも異議のないところであるが、原日本人でないといえ、直にそれを帰化支那人としてしまうところに従来が悪い癖があった。

坂上田村麿将軍は多分おおわだつみ族の出で、その体重二百一斤、身長五尺八寸、眼は蒼隼の如く、鬚髯金線に似たとあるのは、羅々族もしくは

タアジイじん  
大食人（セム族）を思わせるに十分な条件である」

<sup>26</sup>。「おおわだつみ族」とは、天孫民種が日本列島にやってくる以前から日本に暮らしていた民種で、更に元をたどればアジア南方からやってきた人々だという<sup>27</sup>。「これら種々雑多な民種・民族・の血液と文化、すなわちその生活様式を打って一丸とし、日本民族という立派な渾一民族に仕立てたものが、高天原から徙遷してきた天孫民種、すなわち原日本人であること、すでに文献の上で明か」<sup>28</sup>というのが白柳の、日本民族の起源についての理解だった。

こうして白柳は、民族を北種と南種に分け、日本民族の中心は北種であり、何種に属する漢民族の影響を、日本の古代史から取り除こうとしているように見えるが、この図式について興味深いことは、韓国・朝鮮人は北種に分類されていることである。したがって、日本人と韓国・朝鮮人は近い存在だというのが白柳の認識である。白柳はこう述べる。

「台湾人が十年以上も早く日本国民として包容され、その教化上・融合上・政府当該機関の有らゆる施設と不断的努力とを以てして、その効果遅々とし



て挙げらず、その業績は、十余年後に併合された朝鮮人の素晴らしい勢で日本民族として渾融同化されて行くのに及ばざるものがあるというのも、畢竟、支那人と朝鮮人との間に、かなりに深刻な根本的な血統上・文化上の相違が横わっているということを意味するのではないか。すなわち朝鮮人は（中略）民族学の上から観ると、元来その血統と文化とを同じくしたものであって、言語・祭祀・風俗・習慣・ともに全くその流れを同じくするところから、一旦両国の間に併合条約が成り、国境が撤廃せられたとなると、血統も文化も民族本来のそれに促され、滔々として渾融同化して行きつつあるのではなからうか。支那人を教化包容する仕事の容易でないことは、台湾がわが国の版図に帰してからここに約半世紀、その住民の教化融合の容易でないことによっても推して考えられるわけだ。民族学に根基せぬ国策の脆弱であって、砂上の楼閣にも等しいことは、この一事を以てしてもよく分るわけだ」<sup>29</sup>。政策決定は適切な民族理解に立って行わなければ成果が出ないという考え方は、先に紹介した「日中は同種同文にあらず」というものと同じだが、この朝鮮観・台湾観は、現代日本における一般的なイメージと正反対であるという点で興味深い箇所である。また、敗戦の3年前、韓国併合から30余年を経た時点に至っても、日本の知識人が韓国・朝鮮ナショナリズムを理解することができていなかったことを示す一例でもあるだろう。

このように白柳は日本民族の起源を考察するなかで漢民族的な要素の剔出を試みているが、こうした言説の背景にあるのは、もちろん1937年に勃発して以降泥沼化して継続中だった日中戦争である。今も昔も、日本文化および日本思想に対する中国文化とその思想の影響は自明のものだと一般には思われているが、日本文化・日本思想が中国のそれから独立し得ているのが改めて問われることとなった。また、同じ問いが西洋に対して問われることになったのが「大東亜戦争」の勃発以降の状況であり、具体的には「近代の超克」座談会や、京都学派などによる「世界史の哲学」の試みだった。この意味で、日中戦争と日米戦争は思想的な事件でもあった。

こうした文脈において注目すべき文献には、例え

ば津田左右吉『支那思想と日本』がある。同書は近衛内閣による「国民政府を相手とせず」声明の出た1938年の、11月に刊行された岩波新書であった。初版の前書きには「この二篇は、いずれも今度の事変の前に書かれたものであるが、事変によって日本と支那との文化上の交渉が現実の問題として新により起されて来た今日、再びそれを世に出すのは、必しも意味のないことではあるまいと思う。日本人が日本人みずからの文化と支那人のそれとに対し、また支那人が支那人みずからの文化と日本人のそれとに対して、正しい見解をもつことの必要が今日ほど切実に感ぜられる時はない。もしその見解にまちがったところがあり、そうしてそのまちがった見解に本づいて何らかのしごとが企てられるようなことがあるとしたら、そのなりゆきには恐るべきものがある」と気づかわれるからである」<sup>30</sup>とあり、日中戦争が勃発して以降の状況における刊行だったことの意識が明らかであり、また、適切な政策判断のためには正しい文化理解が必要だとの立場は白柳と姿勢を同じくするものだろう。

津田は「ニホン人とシナ人とが（中略）別々の文化を形づくり別々の民族性を養って来た、全くちがった二つの民族であることを、ニホン人もシナ人も、十分に知ってかからねばならぬ」<sup>31</sup>と述べており、白柳と基本的な見方を同じくしている<sup>32</sup>。

白柳は主に血統面から日本民族と漢民族の違いを説くが、津田は思想面から日本と中国の違いを説く。たとえば礼について。

「日本人は文字により書物によってそれに現れている思想のみを知るのであり、そうしてまたシナ人の実際生活をば全く知らなかったから、その思想が実際の生活と如何なる関係にあるものであるのかがわからず、従ってこの点にもその思想の真の意義が領解せられない理由がある（中略）日本人は初から儒教のそういう礼を学ぼうともせず、また生活のしかたの全く違っている日本人にはそれは学ぶことのできないものであったから、礼を通してその根柢にある道德觀念を理會することもできなかった」<sup>33</sup>。津田は、日本人には中国思想を理解できなかったという立場をとるので、「日本人は独自性を保ちつつ中国思想の良いところも取り入れた」といった見方をも否定する。「日本人はシナ思想をう

け入れるに当って取捨選択を誤らず、学ぶべきものは学び学ぶべからざるものは学ばなかったというような俗説は、事実に背くことの大きなものである。シナ思想の取捨選択をするにはシナ思想そのものを十分に理会した上でなくてはできないはずであるのに、その理会がまだよくできなかったのである」<sup>34</sup>。

話を白柳に戻すと、白柳は日本文化の中国に対する独自性を示すところから更に進んで「中国古代文化北種起源説」を唱えている。三皇五帝は漢民族ではないというのである。

「近來民族学的研究の発達につれ、これら古代支那に於ける王道文化の草創者並びにその継紹者が、果して漢民族であったか否かを疑うものが多くなり、有力な考古学的資料もおいおいに出そろって、今日では三皇・五帝・のいわゆる王道文化なるものは漢民族の創建にかかるものではなく、これこそ高天原民種・原朝鮮人・原満洲人・東部シベリア古族・等、全くその民種的血統を同じくする北支那ツングウスの打建てた文化であったということに、諸学者の説が一致しかけてきている」<sup>35</sup>

さすがに中国の古代文化は日本人が創ったとまでは主張していないが、そこに高天原民種が関与しているとは述べている。三皇五帝は伝統的に理想視されてきた存在だから、それが実は北種だったとすることは、日本民族を漢民族より優位に位置づけようとする言説の一環ということになるだろう。戦前昭和において、特に日中戦争が勃発して以降は、日本人の民族的な独自性、更には優位性を述べようとする言説がいくつも表れたが、そこで独自性を主張するために繰り返し表れてきたのは、日本と中国は「一つ」なのかどうか、日本文化ないし思想は、中国文化ないし思想の影響を受けておらず、独立したものであるのかどうか、という問題だった。

### 3. おわりに

戦前昭和の日本における民族観を検討するに当たっては、そこで天皇がどのように扱われているかについて避けて通ることは本来できないが、本稿では取り扱うことができなかった。**簡潔に触れると、白柳は雄略天皇に多く言及していることが注目される。**今日では歴代天皇のなかで雄略天皇はよく言及される存在とは思われないが、民族精神高揚期においては、大陸への雄飛を象徴する天皇が雄略天皇だったのではなかろうか。日本民族の伝統を体现する存在として天皇が語られるとき、そこで注目されるものとしては、和歌を詠む存在としての天皇や、農耕と結びついた存在としての天皇がしばしば浮上するように思われるが、戦前昭和においては「外征する天皇」も注目されたのではなかろうか。例えば「民族」をキーワードとして活動した戦前の知識人には保田與重郎がいるが、保田の代表作の一つである『わが萬葉集』は欽明天皇に触れるところから始まり、欽明天皇の外征の遺訓がその後長く影響を保ったと述べている。これら対外関係の観点から、天皇観についても再検討しなければならないだろう。

### 参考文献 等

- アーネスト・ゲルナー（加藤節監訳）『民族とナショナリズム』岩波書店、2000年  
白柳秀湖『日本民族論』千倉書房、1942年  
白柳秀湖『歴史と民族文化』千倉書房、1938年  
津田左右吉『支那思想と日本』岩波書店、1938年  
廣瀬陽子『コーカサス 国際関係の十字路』集英社、2008年  
矢部貞治『政治・民族・国家の話』講談社、1980年

<sup>1</sup> なお、日本において民族について考察する場合には、「日本語の「民族という言葉には、近代国民国家の概念と深く関連する政治的共同体の意味合いが強い英語のネーション (nation) の概念と、政治的共同体とは無関係に同一の文化を共有する集団として認識される英語のエスニック・グループ (ethnic group) の概念が混在してしまっており、どちらの意味で使用されているかということに配慮する必要がある」(廣瀬 2008、p.28)」という廣瀬陽子の指摘をふまえることが重要である。

<sup>2</sup> 矢部 1980、p.70

<sup>3</sup> 同上

<sup>4</sup> 矢部 1980、p.72

<sup>5</sup> 矢部 1980、p.77

<sup>6</sup> 矢部 1980、p.73

<sup>7</sup> 同上

<sup>8</sup> 矢部 1980、p.78。なお、矢部は民族について、「民族は、自然的に生成した存在であって、国家権力によって組織化されている「国民」とは別物である」(矢部 1980、p.80) とも述べている。一方で矢部は、民族意識の自覚をもたらしたのは「近代国家の統一の任務を担った王侯の従属者の間に生れた、運命共同の意識」(矢部 1980、p.72) とも述べている。これをどう解したらよいのだろうか。またこれは、矢部の民族観のみならず、「民族とは何か」について考える際のポイントでもあろう。民族とは、「下から」、人間集団が自然的に形成してゆくものなのか、或いは「上から」、為政者の意識が発端となり、それが被治者の間にも浸透して成立するものなのか。この点についてゲルナーは「民族は人間が作るのもであって、民族とは人間の信念と忠誠心と連帯感とによって作り出された人工物なのである」(ゲルナー 2000、p.12) と述べる。ゲルナーは「上からか下からか」という図式では語っていないが、自発的に生成したものではなく、作為の産物だという立場をとっていることになるだろう。

<sup>9</sup> ゲルナー 2000、p.12

<sup>10</sup> 白柳 1942、p.147

<sup>11</sup> 白柳 1942、pp.150,151

<sup>12</sup> 白柳 1942、p.336

<sup>13</sup> 白柳 1942、p.260

<sup>14</sup> 白柳 1942、pp.351,352

<sup>15</sup> 白柳 1942、p.508

<sup>16</sup> 『日本民族論』の初版は 1934 (昭和 9) 年に出ており、白柳の著作で題名に「民族」の語を含むのは同書が初めてである。なお、『日本民族論』は 1942 (昭和 17) 年に改版が出ており、本稿は考察の対象を 1940 年代とするため、改版をテキストとして用いる。

<sup>17</sup> 白柳の転向、更に具体的に言えば唯物史観の放棄は、従来言われているよりかなり遅かったことは、以前の論考「白柳秀湖『維新革命前夜物語』の特質(1)初期社会主義者・民間史家による「維新革命」再論」(東京電機大学総合文化研究第 16 号、2018 年) で指摘した。

<sup>18</sup> 気候区分はケッペンの方式を採用している (白柳 1942、p.29)。

<sup>19</sup> 白柳 1942、p.26

<sup>20</sup> 厳密には南北というよりは、赤道付近とそれより以北の北半球、という図式であるように見える。白柳は赤道付近に住む民族を「南種」、それより北に住む民族を「北種」と呼ぶ。また、東西という枠組みに関して、後に検討する津田左右吉は、「東洋の文化というようなものが果してあるのか」(津田 1938、p.105) と問う。ここで検討されているのは日中印だが、シナ思想は日本思想に根本的には影響をあたえていないというのが津田「日本はシナ思想を如何に受け入れたか」(津田 1938 所収) の説だし、シナとインドも別個のものだというのが津田「東洋文化とは何か」(津田 1938 所収) の説である。

<sup>21</sup> 白柳は『歴史と民族文化』で「日本は、文化という観点からいえば、南方のあらゆる文化と北方のあらゆる文化との合流点であったことが確かだ (中略) 人間生活のあらゆる方面に、南

方系統のものと北方系統のものが織込まれ、それが渾然たる調和をなしている。アジアのどこに行っても、その民族文化は、南に偏するかさもなくば北に偏するかしているのであるが、日本だけは、南方文化と北方文化とが同じ分量で、しかも渾然と調和されている」(白柳 1938、p.31) と述べている。

で<sup>22</sup> 白柳は「民種」について「本書では、一つの民族が成立するまでに摂取包容した血統の単位を『民種』と呼び、それを『民族』の使用と厳重に区別する」(白柳 1942、p.7) と述べている。

<sup>23</sup> 「高天原民種」という用語も、「天孫民種」と区別せずに使われている。

<sup>24</sup> 具体的には、白柳 1938 : pp. 136,137。なお、白柳はこうした表現を好み、「ロシア人は『西洋のアジア人』といってもよく」とも述べている (白柳 1942、p.122)。

<sup>25</sup> 白柳 1942、p.113

<sup>26</sup> 白柳 1942、p.230

<sup>27</sup> 白柳によれば「おおわだつみ族」、「おおやまずみ族」、「天津系国津神」が三大先住諸民族であり、「国津神」と呼ばれてきたのは彼らのことだとする (白柳 1942、pp.297,298)。

<sup>28</sup> 白柳 1942、p.296

<sup>29</sup> 白柳 1942、pp.6,7

<sup>30</sup> 青空文庫を参照した。なお「この二篇」とあるが、『支那思想と日本』は「日本はシナ思想をいかにうけ入れたか」と「東洋文化とは何か」の二部から成っている。また、原版のまえがきは「……ただ原版の「まえがき」には、はじめて出版せられた時のニホンとシナとの情勢を考慮に入れて書いたところがあり、従って今日では言う必要の無いことが、いくらか、そこに述べてあるから、これだけは書きかえることにした」(津田 1938、p.i) として、1947 年に出た版では、ちょうど引用した箇所が削除されている。「まえがき」の改変は小さくはなく、ほぼ半分に短縮されている (1947 年版の「まえがき」の頁数は 6 頁)。引用した箇所の他に削除されたのは「日本は今、支那人の抗日思想をうち破り、両民族が、支那において、互に手をつないではたらくことのできるような新しい状況をつくり出そうとして、いのちがけの努力をしている」など「抗日」を含む文や、「弱いと見たものに対しては、いかなることをもしかねないのが、支那の民族性の重要な一面である」、「今日では日本が支那から学ぶべきものは何もないが」などの文である。皇国史観を批判することは臆することなく行敢行した津田であっても、少なくとも戦前においては中国を蔑視する感情から自由ではなかった。なお、その他の違いは「日本」と「支那」が新版では全て「ニホン」と「シナ」に改められている。日本語の発達のために漢字使用は妨げになるという見解は旧版の「まえがき」でも既に表明しており、この見解に基づいて新版では固有名詞を漢字で表記しなかったのであろう。なお、「まえがき」の末尾に付された署名も「りくちゅう ひらいづみ において つだ さうきち」である。

<sup>31</sup> 津田 1938、p.iv

<sup>32</sup> ただし津田は「……その政治や道徳の思想は如何なるものであるか。それについて第一に注意せられるのは、すべてが人を本位とし人に始終していることであって、この意味においてシナ思想は非宗教的である。道徳は人の道徳であって神の関するところではなく、世界の道徳的秩序は現実の人生に於いて保たれるとするとともに、シナ思想の特色がある」(津田 1938、p.10) と述べており (津田の中国思想に対する基本的な見方は「すべてが直接に人の現実の生活に関係のある」といったものであり、抽象性が低いとみていた)、この点は白柳と対照的である。白柳は宗教を南種から生まれるものと見ており、南種に属する漢民族は南宋で道教を生んだという。ここには「南種は宗教的で北種は科学的」という図式があり、日本を北種の方に分類している。『日本民族論』において唯物史観からの離脱を始めた白柳だったが、ここはまだ初期社会主義者の発想が名残をとどめているところだろうか。基本的に白柳は南種に対して北種が優位するものだと捉えており、また、マルクス主義者であれば、基本的発想は科学の宗教に対する優位であろう。

---

<sup>33</sup> 津田 1938、pp.40,41

<sup>34</sup> 津田 1938、p.42。しかし日本人には中国思想が理解できないとなると、日本人である津田には中国思想が理解できるのかという素朴な疑問が生じるが、「結語」に「西洋の文物に接するに至って、知識社会においても始めてシナの文物なりシナ思想なりに疑を容れるものが生じてきた。それはシナのと違う文物があり思想があることを知ったためばかりでなく、それに刺激せられて、日本人の生活とシナの文物シナ思想との矛盾に気がついたからである」（津田 1938、pp.100,101）とある。

「シナの書物によってのみ知識を得るものはシナ人の考え方によって考える外は無かった」（津田 1938、p.51）という状態が、西洋思想の流入によって解消されて以降は、中国思想を適切に理解することができるようになった、という論法なのだろう。

<sup>35</sup> 白柳 1942、p.126。なお、白柳は、中国の王朝で漢民族によるものであることが明らかなのは夏以降だとする（白柳 1942、pp.126,127）。